

出会いはタカラモノ

子どもから教えられたことばかり



佐藤比呂二

さとうひろじ／東京都生まれ。
特別支援学校教員。編著書に『ホントのねがいをつかむ—自閉症児を育む実践』(全障研出版部)など。

第1回 子どものホントのねがいに気づく

障害児教育との出会い

学生時代、私は普通校の数学の先生になろうと考えていました。障害児教育のこととは一切頭になく、希望もしていませんでした。ところが、思いがけず障害児学校から面接の話がきて…。そのときの校長とのやりとりです。

「君の大学での卒論のテーマは?」

「はい、『レンズ空間におけるブリッジ分解の考察』です」

「君が大学で勉強したことは、この世界では一切役に立たないかもしれませんけど、それでもいいかい?」

私は迷わず答えました。

「はい! いいです!」

即答できたのは、校内を案内されたときに出会った子どもたちを「かわいい」と感じたから。ただそれだけでした。

こうして私は障害児学校の先生になりました。

障害児教育のことも福祉のこともまったく知らないままのスタートでした。知的障害の子どもたちとどう関わればいいのか? 私は、ただただ、子どもの出方に反射的に反応していました。歌が好きな子にはリクエストに応じてひたすら歌い、絵が好きな子とは毎日お絵かきをしました。「目の前の子どもがどうすれば笑ってくれるかな」という思いだけでした。まあ、今もこの姿勢は変わっていませんが…。ただ、それだけではうまくいくはずもなく、授業を嫌がる子、パニックになった子の気持ちがわからずオロオロする日々が続きました。

しかし、そんな先の見えない関わりを続いているうち、「あつ、そんな風に思っていたのか」「えつ、そんなねがいがあったのか」と気づかされる瞬間がありました。

こだわりの強い自閉症児が自分のこだわりを食い止めようと必死に葛藤したり、不登校になつた子が自分の居場所を見

つけて変わっていく姿に、彼らの本当のねがいはなにかを教えられた思いでした。

彼らとともにした時間は私にとって大切なタカラモノです。この連載を通して、「出会った子どもたちが教えてくれたタカラモノ」をお伝えできればと思います。

私の教師人生は、子どもから学んだことの積み重ねと書いていいものですから。

どんな行動にも理由がある

シユン君(知的障害・自閉症、中3)には、強いこだわりがいくつもありました。物の置き場所を決める、偏食がきっかけなどに寒くても重ね着は絶対にしない等、数え上げればきりがありません。学校に着てくる服も2着だけに決めていました。保護者会で母親は「家には、この2着が何着もあります」と話していました。ご苦労がうかがえます。

シユン君は、朝、教室に入ると連絡帳の入ったカバンを放り投げ、いそいそと掃除用具入れの上に登っていきます。あぐらをかいて高みの見物とでもいうように。でも、表情は決して楽しそうではありませんでした。

(なぜ、あそこがいいのだろう?)

シユン君に続き、私も登つてみました。狭くて迷惑そうな顔をしていましたが…。彼の隣で感じたのは、見晴らしがよく教室の隅々まで見えるということ、そして、壁と天井に守られて周囲からなにも来ないということでした。

ここなら苦手な活動に無理に誘われることもない。他害の

ある友だちの手が及ぶこともない。

(そうか、不安の強いシユン君にとって、教室で安心できる場はここしかないのか!)

もしそうなら、いくら「自分の席に座りなさい」と言つたて聞く耳をもつはずないよなあとthoughtでした。無理に降ろそうとしなくとも、教室の隅にソファを置いて休んでいいスペースを作り、決して無理強いされることはないと安心できる人間関係ができてきたら自然に降りてくるようになります。

どんな行動にもきっと理由があるはず。その理由を考えることを大切にしました。

「やつなし」ことに成長を見出す

中3になつたシユン君が、ある日を境に体操着に着替えなくなりました。できていたことができなくなると、「どうにかしなくては」とつい思いがちです。

しかし、その思いはグッとこらえて、なにか理由があるはずとthoughtでした。すると、着替えなくなつた時期が運動会の練習開始の時期と重なつていてそこに気づきました。シユン君は、運動会に強い苦手意識をもつていたのです。

(着替えをすれば、運動会の練習をしないといけない)

そう考えて着替えをしなくなつたのではないかと思い当りました。だとしたら、これは確かな成長です。「学校に来たら着替え」というパターンで行動していたシユン君が「着替えたら運動会練習」という見通しをもつて行動できるよう